SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

近世後期から明治初年における遠江国神職の蔵書傾向：敷知郡宇布見中村家の蔵書の内容とネットワークの分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006619

近世後期から明治初年における遠江国神職の蔵書傾向

―敷知郡宇布見中村家の蔵書の内容とネットワークの分析―

松尾　由希子（静岡大学大学教育センター）

はじめに

本稿の目的は、近世後期から明治初年の移行期における遠江国の神職の家の蔵書傾向について、書籍の内容及び蒐集のネットワークに着目して、検討することにある。題材として、現存する中村家の蔵書と蔵書に押された印（蔵書印）を用いる。書籍の内容から、神職の学問や教養の具体的な内容について、蔵書印から書籍蒐集をとりまく中村家のネットワークについて推測することができる。

今日、近世の書籍をめぐる研究は盛んに行なわれている。家に所蔵された書籍（蔵書）については、1990 年以降に、村役人や医家、神職などの地域の指導者・知識人の家に残された蔵書の存在が指摘され、その書籍の内容について報告されるようになった[1)]。家の蔵書研究が課題としてきたことの 1 つに、家人の学問や教養がある。これまで、庶民の学習に関する先行研究は、主に手習塾や私塾という教育機関を事例にとりあげてきたため、家の書籍を題材とすることは新しい試みであった。ただし、蔵書の存在は、そのまま家人の読書や学習につながらない。この課題を補うために、今日では家人の学問習得や教養形成を実証する場合、蔵書の存在に加えて、実際に家人の読書を示す史料、例えば「読書日記」や書籍への書き込みなどの史料を合わせて分析している[2)]。2 つに、書籍の蒐集をとりまくネットワークである。地域の知識人の存在[3)]や家業（職務）との関連[4)]が指摘されてきた。他にも蔵書をもつ家が地域に果たした役割[5)]や家の蔵書による家人の家業意識の形成[6)]について明らかになっている。

本稿では、中村家の蔵書を題材にして、1.書籍の内容から中村家の学問・教養の特徴、2.蔵書印から書籍蒐集をとりまくネットワークについて検討する。上でも述べたように、本来であれば、読書を示す史料を合わせて検討する必要があるが、対象事例の書籍の点数が多いため、先に本稿において蔵書傾向としてまとめたい。

事例として、遠江国敷知郡宇布見（現静岡県浜松市西区雄踏町宇布見）の神職中村家をとりあげる。主な史料は、中村家の家人が近世後期から明治 8 年（1875）までに蒐集した書籍（「中村家文書」浜松市博物館寄託）約 550 点 1100 冊である。中村家は、代々宇布見で神職を襲職し、士族との関わりも深い家であった。本稿では、書籍蒐集の時期として明治 8 年で区切っている。明治 8 年は、中村家の蔵書形成に強く関わったと考えられる 29 代当主東海（1835~1922）が、中村家に養子入りした年である[7)]。別稿において、中村家の蔵書形成について東海の養子入りに焦点をあてて検討するため、本稿でも明治 8 年で区切っ

た。

1 中村家の由緒と特徴

(1) 敷智郡雄踏村宇布見について

中村家の所在地である敷智郡宇布見村は、近世において浜松藩・吉田藩・幕府の支配下にあった。「雄踏町沿革史遺稿」[8]によると、明治維新前の宇布見の石高は、1518石5斗4合である。その内訳は、浜松領（井上河内守所領）400石、幕府直轄（中泉代官所宰領）900石余り、吉田領（現豊橋、松平伊豆守）160石となっていた。

明治以降になると、明治4年（1871）11月に廃藩置県の令が出て、宇布見村は山崎村とともに浜松県の管轄になり、第11大区19小区と称し、区長、戸長行政を執ることになった。明治8年（1875）、第11大区18小区に変更し、区長及び副戸長をおいて村政を執った。明治9年（1876）になり、浜松県は、静岡県の中に統合された[9]。

(2) 中村家の特徴

「中村家由緒書」[10]や「遠江国雄踏宇布見中村家」[11]に記された当主の履歴から、中村家の特徴をまとめたい[12]。図1は、中村家の略系図である。「家」[13]にとって特徴的な履歴をもっていたり、蔵書形成に関わったりしている当主を中心に作成した。

中村家の初代正範（まさのり）は、三河守範頼（のりより）（源頼朝の弟）の息子で、大和国（現奈良県）に居住した。7代正清は、大和国広瀬郡（ひろせのこおり）中村郷（現奈良県北葛城郡）に住み、唐院城主であったとされている。その後、中村家の子孫は足利義満に太刀などを賜ったり、文明13年（1481）に今川上総介に招聘されて遠江国磐田郡土橋公に米地などを賜ったりしている。家人の武功によって敷智郡宇布見、和田、平松、山崎、大白須など「五ヶ荘」（五郷）を賜ったという。そして、文明15年（1483）に宇布見に移住した。16代正継は、駿河国松枝城主穴戸新左衛門の二男で、中村家に養子入りした。今川家に仕官したために今川家が治めていた駿府に居住したが、勤めあげた後は「米大明神補任神主職」に就いた。米神社（息神社）とは、宇布見にある神社であり、中村家の屋敷近くにある。17代光貞も米神社の嗣官を襲職し、今川家に仕官し、「領主今切船支配」についている。

近世において、遠江国での中村家の位置づけを確固たるものにしたのが18代正吉の代と考えられる。徳川家康と正吉の関係をみていく。家康は、元亀元年（1570）から天正14年（1586）にかけて、浜松城主を勤めた。永禄11年（1568）3月に、徳川家康がお忍びで中村家に立寄り、1泊したといわれている[14]。さらに、家康が浜松城主時代である天正2年（1574）に、中村家で家康の二男於義伊（おぎい）（後の結城秀康）が誕生したという[15]。このことを受けて、中村家は、初代福井藩主秀康の福井松平家（秀康の二男の子孫）に加え、美作津山藩松平家（秀康の長男の子孫）、浜松藩主に御目見を許され、金銀などを下賜されていた[16]。結城秀康の誕生や胞衣塚については、さまざまな由緒書に記されている。その中の1

六代 正経
大和国広瀬郡
唐院郷領主

七代 正清
大和国広瀬郡中村
唐院両城主奉仕

十四代 正実
今川上総介から
招聘される

（宍戸家より養子）
十六代 正継
（実父）駿河国松枝城主
宍戸新左衛門
・駿府在勤
・米大明神仕補神主職兼天神社

十七代 光貞
（室）今川家旗本高橋孫六郎延清女
・米大明社神主
・宇布見領主

（土屋家より養子）
十八代 正吉
・永禄十一年、徳川家康泊
・家康二男（結城秀康）誕生

亀年
（実父）志都呂陣屋代官
土屋条右衛門
（室）大館伯母

（長谷川家より養子）
二十七代（一七七九－一八四二）

大館
（実父）遠州豊田郡川袋村水神宮神主
長谷川虎次郎

二十八代（一八二一－一八八九）

（内藤家より養子）
二十九代（一八三五－一九二二）
東海
（実父）宇布見村金山大明神神主
賀茂直博
（室）大館二女屋穂。
娘杵の婿　新所村庄屋伊藤常次郎

図１　中村家略系図

「遠江国雄踏村宇布見中村家」「中村家」「（長谷川家）親類書」（全て「中村家文書」）及び『負け犬の系譜』より作成

つを以下に記す。

……十八世正吉徳川家康公本国打入ノ先導ト為リ功アリ佩刀賜銘日天賜海別御代官兼軍船奉行トナル、「天正元(カ)年」公ノ側室永見氏娠メル公密ニ之ヲ正吉ニ託「シ本多重次護(衍)護ス」セシム、既ニシテ○「(罫紙欄外)○天正二年二月八日分娩男ヲ産ム」分娩男ヲ生ム、是ヲ越前中納言秀康卿ト為ス、正吉之ヲ鞠「養」育スルコト三歳、公其忠恪ヲ嘉ミシ葵紋附小柄笄及時服ヲ賜テ之ヲ賞ス、越前作州二侯倶ニ卿ニ出ルヲ以テ~~作州侯乃チ~~正吉子孫「正」ヲ禄シ世々津山藩籍ニ(衍)ニ列シ仍ホ本土ニ在テ卿ノ産土「氏神」天神社「宮祠官」「兼初テ」及産所胞衣塚ヲ護~~シ兼テ~~「ス」~~祠官タラシム~~、越前侯モ亦世禄百石ヲ給ス、明治〔空欄〕年華族禄制改正ニヨリ世襲ノ家禄廃セラル、爾来~~産土~~「松平家氏神」天神社及産所胞衣塚保護科トシテ~~松平~~両家ヨリ金弊若干年々贈与「ス」~~有ス~~、……

(「中村東海履歴」[17])

中村家は、延宝6年（1678）から庄屋を勤めた[18]。その間、浜松藩主への「独礼」を許された。「独礼」とは、年頭などにおいて藩主に単独でお目見できるものであり、庄屋の格式を表す。正保・承応（1645～1654）の頃に独礼庄屋であったのは、有玉村高林家、万斛村鈴木家、伊場村岡部家、笠井村山下家であつた。延宝7年（1679）には、中村家の当主も独礼庄屋として藩主に挨拶をしたという記録が残っている[19]。美作津山藩主松平三河守には面謁を賜り[20]、士分格であった。

以上、近世において中村家は米神社の嗣官を襲職し、庄屋を勤め、士分格であるという特徴をもっていた。

2　蔵書形成に関わった中村家の家人

ここでは、蔵書形成に関わったと考えられる中村家の家人について、履歴をまとめる。蔵書形成に関わった根拠として、書籍への書き込みがあげられる。書籍には、持ち主や写本の作成者の名前が書き込まれることがある。中村家の蔵書には、このような書き込みのある書籍がある。また、学習履歴や教育履歴から蔵書形成に関わった可能性のある家人が存在する。以上の観点から、近世から明治8年にかけて中村家の蔵書形成の中心であったと推測できるのは、27代亀年、28代大館(おおだて)、29代東海である。

（1）27代亀年（1779～1841。別称は亀正、準之助、源左衛門）

亀年は、寛政12年（1800）に土屋家から中村家へ養子入りした。実父は志都呂陣屋の代官土屋条右衛門であり、二男にあたる。亀年は、国学を学んでいた[21]。また、天保2年（1831）、29代当主東海の兄である山本金木（1826～1906）は8歳になった時に、亀年のもとに入門して字を習ったという[22]。このように、亀年は国学を学びながら、地域の子どもの教育にも携わっていた。

（2）28代大館（おおだて）（1821～1889。別称は、貞則、源左衛門）

中村家の蔵書の中には大館の書き込みが確認できる書籍がある。書籍の内容は作法や武術に関わるもので、相伝の書である。

大館は、天保12年（1841）に長谷川家から中村家へ養子入りした。天保13年（1842）に出府し、津島美作藩主斎民のもとへ家督継の挨拶に出向いた[23]。大館の実家の長谷川家は神職に就く人が多い家であった。天保15年（1844）に大館が作成した「親類書」[24]によると、父は遠江国豊田郡川袋村（現静岡県磐田市川袋）の「水神宮神主」長谷川虎次郎、伯父は遠江の「四十六所大明神神主」桑原石見、いとこも川袋村で神職に就いている。母は「水野越前守家中拝郷縫殿（はいごうぬい）」の妹である。拝郷は、文政元年（1818）浜松藩主だった水野忠邦の家老である[25]。長谷川家も中村家と同様に、浜松藩とも関わりのある家であることがわかる。伯母は、中村源左衛門（27代亀年）のもとに嫁いでいる。そのことが縁で、大館は中村家の養子になったものと考えられる。

大館の孫である正輔（まさすけ）が、明治14年（1881）に作成した「中村大館小伝」[26]及び「遠江国雄踏村宇布見中村家」[27]により、大館の学問習得の概略がわかる。大館は算術に詳しく、和歌を石川依平（1791～1859）に学び、国学を平田鐵胤（1799～1880）に学んだ。石川依平は、遠江国小笠郡東山口村（現静岡県掛川市東山口）に生まれ、本居春庭に入門し、同国の国学者栗田土満（ひじまろ）や加納諸平らとも親交があった。掛川藩主は、石川の学芸を賞し、終身三人口の給米を下賜したという。門下生は300余人いたといわれる[28]。門人帳「橿之本門人姓名録全」（浜松市立中央図書館所蔵）によると、大館の石川への入門は嘉永3年（1850）である。平田に入門したのは慶應2年（1866）であり、三河国の神職羽田野敬雄の紹介で入門している[29]。

幕末には報国隊に入り、奔走した。報国隊とは「慶應四年（1868）二月倒幕軍の東下にあたって遠州浜松・磐田を中心として結成された神官層を主体とする民兵隊」[30]といわれている。隊員は300名を超え、そのほとんどが神職だったという。国学や和歌を学ぶ社中の一部が隊員となっていた。

（3）29代東海（1835～1922。別称は正悳、山城、出雲、延光など）

中村家には、東海が作成した写本や入手した刊本が多数残されている。

東海は賀茂家に生まれ、内藤家に養子入りし[31]、明治8年に中村家に養子入りした、実家である賀茂家は、代々宇布見村の金山彦神社の嗣官を襲職する家である。後継ぎ以外の

兄弟は、別の神職の家へ養子入りしている。

1度目の養子先である内藤家は、新所村（現静岡県湖西市新所）にあり、代々八幡宮神社の嗣官を襲職している家だった。神職に就く以前、内藤家7代と8代（1724～1804）は三河国吉田藩主松平豊後守資訓（すけのり）に仕えていた[32]。元文5年（1740）から寛延2年（1749）にかけて浜松遷城になったことで、資訓は浜松に住むことになり、内藤家の当主も浜松にいた。しかし、宝暦8年（1758）、資訓の息子資昌（すけまさ）が丹州宮津城替になったことで、内藤家8代当主は辞任して神職に就いた。10代（1795年生）の娘は、「吉田家中飯塚森左衛門」に嫁いでいる。このように、神職を襲職する家であるが、士族とも関わりのある家だった。

東海の芸及び学問歴についてまとめる。「中村家の由緒・中村東海の履歴」[33]によると、弓道、詠歌、俳諧、国学を学んでいたことがわかる。

弓道については、日置流雪荷派に属している。日置流は、大和の日置弾正正次の始めたものであり、その流れを汲むものに吉田流・日置流雪荷派・日置流印西派などがあり、遠江では主に雪荷派・印西派が主流であったという[34]。雪荷派の系統によると、東海の実父が中村正常（本事例の中村家の分家[35]）の門人であり、東海は実父の弟子になる[36]。雪荷派には、宇布見の人も多数みられることから、地域の指導者や知識人の間に普及していた武芸であると推測できる。近世において、遠江国各地の神社や仏閣及び弓術家の屋敷には矢場が設けられ、特に神社では奉納の競射会が盛んに行なわれたという。競射会は、神事とは異なり、2日にわたる神社の祭典であり地域の同好者が矢場に集まり、終日射的を競うものだった[37]。このような特徴から、弓術はただの芸ではなく、同じ地域で弓術をしている人たちと親交を深めるためのものであり、神職としても必要な教養であったといえるだろう。岩崎鐵志氏は、弓術の社会的機能として、神事や競射をあげている[38]。

国学を学ぶ過程で、和歌を詠むことも多くなるため、東海の詠歌は国学と関連付けることができる。国学については、羽田野敬雄（1798～1882）と平田鐵胤のもとで学んでいる。羽田野は、三河国羽田八幡宮の嗣官で、本居大平（1825年に入門）及び平田篤胤（1827年に入門）に学んだ人物である。羽田野は、多くの人を平田に取り次いで、平田門人を増やしていた。東海もその一人であり、慶應2年12月に、平田に入門した[39]。内藤家を継いでいた慶應4年（1868）に、東海は大館と同様に、報国隊の一員として活動していた[40]。2人の報国隊の活動の背景に、神職や平田門人という共通点がうかがえる。

俳諧については、現段階において東海の具体的な学習履歴を示す史料をみつけられていない。しかし、三河国の俳人佐野蓬宇（1809～1895）の交友人名録「蓬宇連句帳十五偏　八止」[41]の中に東海の名前を確認することができる。

以上、中村家の蔵書形成に関わったと考えられる3代の当主の履歴をみてきた。3人に共通するのは3点である。1つは、養子として中村家に入った点である。大館と東海については、実家も中村家同様に神職を襲職してきた家であり、兄弟や親せきも他家へ養子入りして神職についていた。2つは、実家やその前の養子先が士族と関わりのある家であったという点である。3つは、国学を学び、弓術をしていたという点である。大館と東海については、

平田に入門し、平田鐵胤に学んでいる。家業や家の由緒、学問の内容という点で共通していた。3人は別々の家から中村家へ養子入りしているものの、必要としていた学問や教養は類似すると考えられ、その結果、蒐集する書籍も共通していたと推測できる。

3 中村家の蔵書傾向—内容とネットワーク

ここでは、明治 8 年までに中村家が蒐集した書籍について、書籍の内容と書籍蒐集をとりまくネットワークについてまとめる。刊行年や筆写年や書き込みから、明らかに明治 8 年より後の蒐集であるものは対象から除いたが、明治 8 年以前に蒐集した書籍と蒐集年がわからない書籍については分析対象としている。書籍は、例えば「出定笑語」という書籍が 4 冊存在する場合、1 点 4 冊と記載する。分析対象の書籍は、約 550 点 1100 冊である。

(1) 蔵書の内容

①内容

内容によって分類できたのは 405 点 884 冊（うちわけは刊本 223 点 527 冊、写本 180 点 217 冊、刊本・写本[42] 2 点 140 冊）である。刊本と写本の割合については、刊本が写本よりも多い傾向にある。

中村家の蔵書の内容について、表 1 にまとめた。まず、書籍の内容を示す「内容」の項目をみると、多い点数から、「神道」29 点 52 冊、「国学」27 点 70 冊、「名鑑」22 点 28 冊、「弓術」19 点 23 冊となる。「神道」「弓術」は中村家の家業である神職に関わり、「国学」は家人の学問に関わり、「名鑑」は士族との関わりがうかがえると同時に、村役人として必要な情報だったと考えられる。

次に、表 1 の「分類」の「国学」「漢学」「歴史」「神職」をとりあげる。国学に関わる内容（「国学」「和歌」など）は、95 点 223 冊（実質点冊数）、漢学に関わる内容（「漢学」「漢詩」など）26 点 38 冊、歴史に関わる内容（「名鑑」「武家故実」など）88 点 317 冊（実質点冊数）、神職に関わる内容（「神道」「弓術」など）79 点 114 冊である。家業である神職や家人が学んでいた国学に関する内容の書籍が多い。「歴史」は、神職に必要とされる知識であり、国学にも関わる内容である。また、「家」の由緒にも関わるため、村役人が所蔵していることが多い。「漢学」の書籍も存在する。現段階で、中村家の 27 代から 29 代の当主の学習歴がわかる史料の中に、漢学はあがっていない。しかし、記載がないことで学んでいなかったとは考えにくい。なぜなら、一般的に近世において村役人を勤める家の人は、まず漢学を学ぶからである。漢学を基盤にして、次の学問、例えば国学などを学んでいく。したがって、中村家の当主の学習歴に漢学はないが、実際は学んでいたと考えられる。中村家の蔵書中の漢学書の存在から、家人の漢学の学習をうかがうことができる。ただし、全書籍数にしめる漢学の点数冊数の割合は、少ない。

表1　中村家の蔵書の内容

分類	内容	刊本*	写本*	刊本**	写本**	合計	備考
国学 95点223冊 （実質点冊数）	国学	9点43冊	17点26冊	1点1冊		27点70冊	刊・写1点3冊が、のべ数としてそれぞれ含まれる。
	和歌	6点23冊	7点9冊			13点32冊	
	地誌	2点2冊	5点5冊		2点3冊	12点14冊	
	歌集	6点15冊	5点7冊			11点22冊	
	有職故実	2点2冊	5点5冊	1点1冊		8点8冊	
	語学	5点10冊	1点1冊			6点11冊	
	紀行	3点7冊	3点3冊			6点10冊	
	物語	3点27冊				3点27冊	
	思想	3点9冊				3点9冊	
	和歌注釈	3点8冊				3点8冊	
	語彙	2点3冊				2点3冊	
	歌学	2点9冊				2点9冊	
	歌文集	2点6冊				2点6冊	
	和歌漢詩	1点1冊				1点1冊	
漢学 26点38冊	漢学	12点19冊				12点19冊	
	漢詩	8点12冊				8点12冊	
	漢詩文	3点4冊				3点4冊	
	漢詩和歌	2点2冊				2点2冊	
	漢文	1点1冊				1点1冊	
歴史 88点317冊 （実質点冊数）	名鑑	22点28冊				22点28冊	
	武家故実		15点20冊			15点20冊	
	記録	7点143冊	3点139冊			10点282冊	刊・写1点137冊が、のべ数としてそれぞれ含まれる。
	通史	6点38冊	2点2冊			8点40冊	
	伝記	5点23冊	2点4冊			7点27冊	
	雑史	1点1冊	5点9冊			6点10冊	
	兵法	1点1冊	3点5冊			4点6冊	
	戦記		3点3冊		1点1冊	4点4冊	
	系譜		2点5冊			2点5冊	
	雑記	1点1冊	1点3冊			2点4冊	
	法制注釈	2点15冊				2点15冊	
	陵墓	2点2冊				2点2冊	
	史論	1点6冊				1点6冊	
	考証雑記		1点2冊			1点2冊	
	考証		1点1冊			1点1冊	
	通史注釈	1点1冊				1点1冊	
	名鑑武鑑	1点1冊				1点1冊	
神職 79点114冊	神道	18点41冊	6点6冊	1点1冊	4点4冊	29点52冊	
	弓術	1点5冊	15点15冊		3点3冊	19点23冊	
	祭祀	1点1冊	7点7冊		5点5冊	13点13冊	
	神社	5点8冊	4点4冊		1点1冊	10点13冊	
	神祇	2点2冊	2点2冊			4点4冊	
	神道日蓮	1点5冊				1点5冊	
	祝詞				1点1冊	1点1冊	
	祭礼	1点1冊				1点1冊	
	祝詞注釈	1点2冊				1点2冊	
	俳諧	4点8冊	1点1冊	2点2冊	2点4冊	9点15冊	
	文書		9点9冊			9点9冊	
	辞書	6点18冊		2点2冊		8点20冊	
	注釈	5点6冊	2点3冊			7点9冊	
	医学	3点4冊	4点4冊			7点8冊	
	教訓		2点2冊	1点1冊	1点1冊	4点4冊	
	随筆	1点14冊	2点2冊			3点16冊	
	茶道	2点4冊	1点1冊			3点5冊	
	歌謡	2点3冊	1点1冊			3点4冊	

分類	内容	刊本*	写本*	刊本**	写本**	合計	備考
	政治	3点4冊				3点4冊	
	馬術		3点4冊			3点4冊	
	作法				3点3冊	3点3冊	
	辞書節用集	3点3冊				3点3冊	
	文字	2点2冊	1点1冊			3点3冊	
	随筆注釈	2点26冊				2点26冊	
	書道	2点4冊				2点4冊	
	建築		2点4冊			2点4冊	
	外交		2点2冊			2点2冊	
	往来物	2点2冊				2点2冊	
	手本				2点2冊	2点2冊	
	寺院	2点2冊				2点2冊	
	図案			2点2冊		2点2冊	
	農業	1点1冊		1点1冊		2点2冊	
	年代記	1点4冊				1点4冊	
	仏教絵画	1点3冊				1点3冊	
	漢字	1点2冊				1点2冊	
	浄瑠璃	1点2冊				1点2冊	
	理学	1点2冊				1点2冊	
	飲食	1点1冊				1点1冊	
	英語	1点1冊				1点1冊	
	暦	1点1冊				1点1冊	
	楽譜	1点1冊				1点1冊	
	滑稽本		1点1冊			1点1冊	
	教育	1点1冊				1点1冊	
	説話		1点1冊			1点1冊	
	事典	1点1冊				1点1冊	
	算術				1点1冊	1点1冊	
	雑誌		1点1冊			1点1冊	
	占卜	1点1冊				1点1冊	
	水産				1点1冊	1点1冊	
	書目		1点1冊			1点1冊	
	新聞	1点1冊				1点1冊	
	勅書		1点1冊			1点1冊	
	日記				1点1冊	1点1冊	
	年表	1点1冊				1点1冊	
	日蓮		1点1冊			1点1冊	
	評判記	1点1冊				1点1冊	
	漂流記		1点1冊			1点1冊	
	便覧	1点1冊				1点1冊	
	風俗	1点1冊				1点1冊	
	砲術		1点1冊			1点1冊	
	貿易		1点1冊			1点1冊	
	薬物	1点1冊				1点1冊	
	謡曲	1点1冊				1点1冊	

中村家蔵書(「中村家文書」)より作成

註

1.「内容」は、『国書総目録』の分類基準による。

2.「刊本*」「写本*」は、『国書総目録』の「分類」に記載のあった書籍である。

3.「刊本**」「写本**」は、書籍名がついていなかったり、『国書総目録』の「分類」に記載のなかったりする書籍であるが、内容をみて、著者が分類した。

4.「分類」は、著者の基準で「国学」「漢学」「歴史」「神職」としてまとめた。例えば、「神職」の場合、神職として必要と考えられる知識や教養を「内容」から抽出した。

明治に入ってから蒐集した書籍には、「英語」や「楽譜」、「水産」という内容のものもみられるようになった。新しい時代に対応しようとする家人の態度がうかがえる。

以上、比較的点数冊数が多い書籍について述べてきた。一方で、点冊数に関わらず、内容の種類に着目すると、表1の「内容」は100種類に及んでいる。蔵書の内容は、国学、神職、歴史に関わる書籍を中心としながら多様な内容をそろえていたといえる。

②著者別

書籍を著者により整理すると、1番多いのは平田篤胤で29点79冊（うちわけは刊本17点67冊、写本12点12冊）、2番目に多いのは本居宣長で12点27冊（うちわけは刊本9点21冊、写本2点3冊、刊本・写本1点3冊）、3番目に多いのは羽田野敬雄で7点8冊（うちわけは刊本2点3冊、写本5点5冊）である。3点以上の所蔵が確認できる著者は、本居大平（5点5冊）、紅林三郎右衛門（4点4冊）、栗原信充（3点7冊）、中山繁樹（3点5冊）、賀茂真淵（3点4冊）、伊勢貞丈（3点3冊）だった。これらの人たちは、紅林と伊勢を除いては国学者である。先に伊勢と紅林について説明する。伊勢貞丈（1717～1784）は旗本であり、有職故実の学者である。貞丈の故実は、当時の古儀再興とした国学形成の風潮を反映して展開し、内容は公武の故実、典礼作法から神道に及ぶというものだった[43]。紅林については、現段階ではっきりしたことはわからないが、三河国二川（現愛知県豊橋市二川町）の家の人で、弓術の雪荷派系統表に「二川　紅林連」[44]の名前があり、紅林家は雪荷派に属する家であると推測できる。中村家蔵書の中には、紅林三郎右衛門の名前が記された弓術書が多数存在する。

著者にみる特徴を3点にまとめる。1つは、国学者の著作が多いことである。大館と東海は平田門人であるため、家人の学問と書籍蒐集が対応する結果になった。特に、平田篤胤や平田門人の著作が多い。中村家蔵書の著者の中で、平田門人は東海の師でもある羽田野、矢野玄道、草鹿砥宣隆、鈴木重胤がいる。栗原信充[45]は平田門人ではないが、平田篤胤に学んでいる。本居やその門人の著作も多い。具体的には本居宣長、本居大平、本居内遠、加納諸平、中山美石（うましし）、夏目甕麿（みかまろ）らの著作が存在する。近世の遠江国は、国学者を多数輩出したことで知られている。遠江国の賀茂真淵が伊勢の本居宣長と交流したことで、遠江には本居の国学が広がっていた。本居に学んだ後に平田に入門したり、本居門人でありながら平田に教えを受けたりする人もおり、いろいろな人に学ぶことが可能であった。平田門人である中村家の蔵書には、平田の書籍も本居の書籍も存在している。近世の学びのあり方を家の蔵書にもみることができる[46]。国学者の著作の内容をみると、国学の内容だけではなく「神道」（平田篤胤、平田門人など）、「神社」（羽田野敬雄）、「祭祀」（草鹿砥宣隆、羽田野など）など、神職に関わる内容のものが存在する。近世において、神職と国学の関連は深く、遠江国でも近世において国学を担った中心は神職だった。したがって、中村家に国学者の著作が多い要因として、国学を学んでいたということに加え、神職という家業もあげられるだろう。

2つに、三河国の人の著作が多いことである。羽田野や草鹿砥（くさかど）宣隆、中山繁樹[47]、中山

美石[48]の著作が存在する。羽田野は東海の師であり、師を通じて三河国の国学者の情報を入手していたと思われる。

3つに、遠江国の人の著作が存在することである。夏目甕麿[49]、加納諸平[50]、内山真竜[51]、栗田土満[52]、杉浦国頭があげられる。全て国学者であり、杉浦以外は平田及び平田門人、本居及び本居門人、賀茂真淵門人である。神職や村役人を勤める人たちだった。先に、近世において遠江国では国学者が多く存在したと述べたが、実際に彼らの著作が同地域で国学を学ぶ中村家にも所蔵されていた。

以上、著者に着目すると、中村家の蔵書の著者の中心は国学者であり、特に平田門人、本居門人の著作が多いことがわかった。また、著者の居住地域は遠江国と三河国が多い。国学者のほかには有職故実の学者である伊勢貞丈、弓術や武家故実について著した紅林三郎右衛門がいる。神職という家業や士族との関わりが深い中村家という家の性格を反映しているものと考えられる。

(2) 蔵書印にみる書籍蒐集のネットワーク

表 2 は、中村家の書籍に押された蔵書印と書籍の点数についてまとめたものである。印の種類は 41 種類ある。一般的に蔵書印は、その書籍の持ち主を示すものであるため、蔵書印の分析をとおして、中村家の書籍蒐集をとりまくネットワークについて検討することができる。

点数について、1 番多いのは、内藤家の蔵書印である。88 点の書籍に「遠州新所郷内藤神主家」「内藤」の印が押されている。内藤家は中村家に養子入りする前に、東海が継いでいた家である。2 番目に多いのは、賀茂家の蔵書印である。賀茂家は、東海の実家である。このように、29 代東海が養子入りする前の蔵書印が、多数みられた。

蔵書印の種類は 41 種類と多様である。わかる範囲になるが、説明を付記したい。1 つに遠江国の国学者に関わる蔵書印が存在する。「遠江国浜松庄内岡部縣主蔵書記」「岡部家蔵版」は、岡部家の蔵書印である。岡部家は、遠江国敷智郡伊場村（現静岡県浜松市東伊場町）にあり、賀茂真淵が生まれた家になる。「国頭」は、浜松諏訪社[53]の大祝であり、遠江の国学の祖ともいわれる杉浦国頭をさしているものと推測できる。「遠州引佐橡窪岩間寺蔵書記」は、引佐郡（現静岡県浜松市引佐町）の岩間寺の蔵書印である。東海の兄と岩間寺の住職丹妙（後の三宅均）が友人関係にあるため[54]、丹妙の代のものと推測される。「遠州狩宿邨峯野氏蔵書」「遠江国敷智郡浜松新明宮森讃岐守藤原猶襲蔵書」の蔵書印については、まだはっきりしたことはわからないが、遠江国の人の蔵書を示しているのは確かである。狩宿村（現静岡県浜松市引佐町狩宿）は、内藤家や実父の実家及び東海の兄の養子先でもある山本家の所在する地域と近い場所にある。

2 つに、羽田文庫の蔵書印がおされた書籍が存在することである。羽田文庫は、三河国の羽田野敬雄が、羽田八幡宮の境内の中に創設した文庫である[55]。羽田文庫の書籍は寄付により集められ、寄付した人には吉田藩主、水戸中納言斉昭、本居春庭、平田鐵胤、石川依

表2　書籍に押された印

分類	印の種類	刊本（点数）	写本（点数）	刊・写（点数）	合計（点数）	備考
中村家	中村之所有巾	3			3	
	中村之蔵書印	2			2	
	中村大本家印	2			2	
	中村	5	3		8	
	中村文庫	1			1	
大館	魁香舎	13	7	1	21	28代当主。「魁香舎」は、大館の号である。
	遠江国雄踏魁香舎蔵書	7			7	
賀茂家	遠湖雄踏賀茂蔵書	23	21	1	45	29代東海の実家。「直章」は東海の弟で、賀茂家の後を継いだ人物である。
	賀茂図書	1			1	
	直章	1			1	
内藤家	遠州新所郷内藤神主家	47	30	1	78	29代東海の一度目の養子先
	内藤	7	3		10	
岡部家	遠江国浜松庄内岡部縣主蔵書記	2			2	賀茂真淵の家。伊場村賀茂神社。
	岡部家蔵版	1			1	
伴家	伴文庫	1			1	国学者伴信友か。
	伴氏家蔵	1			1	
	伴氏	1			1	
	東海	1			1	29代当主
	長谷川蔵	1			1	28代大館の実家
	遠州引佐椽窪岩間寺蔵書記	5			5	
	国頭		2		2	遠江の神職、国学者である。
	羽田文庫蔵版	1			1	羽田文庫は、三河国の羽田八幡宮の境内に作られたものである。
	遠州狩宿邨峯野氏蔵書		1		1	
	遠江国敷智郡浜松新明宮森讃岐守藤原猶襲蔵書	1			1	
	敦賀県第五大区小学校蔵書印	1			1	東海は、明治8年に敦賀県で教導職についた。
	克明館文庫印	1			1	克明館は、浜松藩の藩校である。
	伊藤	1			1	中村家の親戚の可能性がある。
	苗木藩石原蔵	1			1	維新後に苗木藩は、平田国学による藩政改革が進む。
	葵園蔵	1			1	
	古橋蔵書	1			1	
	槻舎所蔵	7	1		8	
	桔〇庵図書記		1		1	
	神祇伯家東執事古川美濃関家	1			1	
	箱根山別当所	1			1	
	稲田氏之蔵書		1		1	
	北〇〇水	1			1	
	赤林蔵書		1		1	
	善照寺	1			1	
	橘実成蔵		1		1	
	本市	1			1	
	小林氏図書記	2			2	

中村家蔵書（「中村家文書」）より作成

註

1.「合計（点数）」は、「刊本（点数）」と「写本（点数）」と「刊・写（点数）」を合計したものである。

2.「印の種類」の欄に記した「〇」は、読み取りができなかった文字の代わりにあてた。

3.1点の書籍に、数種類の印が押されている場合、種類の数だけ点数として数えた。そのため、表に記した点数は実際の書籍点数ではなく、印が押された書籍ののべ数になる。

4.1点につき2冊以上の書籍について、全冊数に印鑑が押されていたわけではなかったため、本表では冊数は記さず点数のみを記した。

平などがいた。慶應3年（1867）に文庫の蔵書は1万巻を超えた[56]。東海の師は羽田野敬雄であるなど、中村家の家人は、三河国の文庫の書籍を入手できるネットワークをもっていたことがわかる。

3つに、浜松藩の藩校である克明館の蔵書印がみられることである。藩校克明館は、弘化3年（1846）に設立された。設立時に、主命を受けた藩士岡村黙之助は蔵書の充実をはかり、蔵書は1万を超えていた。克明館は、藩士だけでなく篤学の者の入学を許可しており、その中に伊場村の岡部譲がいた[57]。中村家の蔵書には、岡部家の蔵書印が押してあるものがあり、書籍蒐集のネットワークに岡部家が存在したことが推測できる。岡部家を介して、克明館の書籍を入手した可能性がある。また、中村家自体も浜松藩との関係は深い。先に記したように、家康の二男（結城秀康）が中村家で産まれたことにより、中村家は浜松藩から金銀の下賜などを受けている。他にも28代大館の実母は、浜松藩の家老の妹である。地域の知識人または中村家家人のネットワークによって、藩校の書籍を入手した可能性がある。

4つに敦賀県（現福井県）や苗木藩（現岐阜県中津川市苗木）など、遠江国以外の地域の蔵書印のある書籍が存在することである。東海の履歴に「同年（明治8年をさす）六月十日敦賀県管内神道教導取締被命候」[58]とあり、敦賀で教導職についていた。敦賀での職務との関連で入手したのかもしれない。苗木藩は、維新後に平田国学の影響を受けた藩政改革を進めた藩である。藩内に平田の国学を学んだ人が多いため、中村家の家人が同じ平田門人のネットワークの中で入手した可能性がある。表2に示したように、蔵書印の種類は多様であるが、現段階で中村家との関連がわからないものが多い。今後、調査を続けたい。

以上、限られた数の蔵書印の分析になるが、特徴を4つにまとめた。1つは、神職についている人や神職を家業とする家の蔵書印が多いことである。2つは、28代大館・29代東海の実家や東海の1度目の養子先の家に関わる蔵書印が、全体（蔵書印の押された書籍）の7割をしめていることである。3つは、賀茂家と内藤家の蔵書印の押された書籍をみると、刊本と写本の割合がほとんど同数であることである。両家以外の蔵書印のある書籍のほとんどは刊本であるため、両家の書籍は、異なる傾向を示している。4つは、蔵書印の多様性である。遠江国の神職、大館、東海に関わる人や家を中心に書籍を蒐集していると思われるが、三河国や苗木藩や敦賀という他地域の蔵書印もあり、同地域や血縁関係という近い関係以外からも書籍を入手していたことがわかった。

おわりに

近世後期から明治8年にかけて中村家の家人が蒐集した書籍の内容と書籍蒐集のネットワークから、中村家の蔵書傾向について検討した。

中村家の蔵書内容について、特徴を4点にまとめる。1つは、家人の学んだ国学が蔵書に反映している点である。28代・29代の当主は平田に入門したために、平田篤胤やその門人

の著書が多く所蔵されている。また、平田国学に限定せず、近世の遠江国で多数の門人を要した本居宣長やその門人の著作も所蔵されている。2 つは、「家」の性格が蔵書に反映している点である。中村家は、代々神職を襲職する家で、庄屋を勤め、士族とも関わる家であった。家業や職務、家の由緒を反映して、「名鑑」「神道」「弓術」「武家故実」など歴史や神職に関わる内容の書籍が多く所蔵されたと考えられる。3 つは、三河国の人の著作が多いことである。この要因として、29 代当主の師である羽田野敬雄の存在が考えられる。羽田野は平田門人であり、東三河国では有名な国学者だった。師から情報を入手して、書籍を得ていたと思われる。また、近世において宇布見は、浜松藩、吉田藩の管轄下にあった。当時の行政区分によって人が往来し、それが学問や教養の交流にもつながったと考えられる。三河国と遠江国の学問や教養の交流については、別稿でさらに検討したい。4 つは、蔵書の内容の多様性である。書籍の内容は 100 種類に及んだ。例えば、近代という新しい時代に対応しようとする内容や子どもの教育に関わる内容（「手本」「往来物」「教育」）、芸に関わる内容（「浄瑠璃」「謡曲」）なども所蔵されていた。このような書籍の多様性に、中村家の家人の教養をうかがうことができる。

蔵書印から検討した書籍蒐集のネットワークについて、5 点にまとめる。1 つは、28 代及び 29 代当主の実家や 1 度目の養子先の家である。2 つは、国学者や国学者を出した家である。3 つは、三河国羽田文庫の存在である。4 つは、浜松藩克明館である。5 つは、敦賀県の小学校である。これらのネットワークは、養子入りした当主の実家、中村家の家人が学んだ国学や教導職で敦賀に赴くという職務、浜松藩に御目見を許されるという「家」の特徴と関連づけられるだろう。

以上、近世から明治 8 年まで中村家の蔵書傾向は、内容、ネットワークともに家人の学問、神職、庄屋などの「家」の性格、三河国との関係を反映していたことがわかった。今後の課題は 2 つある。1 つは、実際に書籍を入手したり、読書したりすることがわかる史料と合わせて、本稿の内容をより実証的に検討することである。また、書籍入手や読書の事実の確認にとどまらず、読書や書籍蒐集ネットワークについて地域の支配（行政）などの背景と関連づけて、検討したい。2 つは、蔵書印の調査の継続である。本稿では、手がかりが少なく蔵書印の内容に十分にふみこむことができなかった。蔵書印の人物・家の特徴をおさえることで、さらに中村家の蔵書をとりまくネットワークは詳細になるだろう。

註

1) 家の蔵書の存在について指摘した先行研究は、松尾由希子「江戸期上層庶民の家の蔵書に関する研究－学習環境の視点から－」（博士論文、2008 年、14～15 頁）にも記した。その一つに高倉一紀「竹口家の教養と国学—蔵書構成と所蔵率の分析」（『伊勢商人竹口家の研究』和泉書院、1999 年）などがある。

2) 例えば、 杉仁氏の研究（『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館、2009 年、228～243

頁）がある。ただし、家の文書の中に、蔵書とその読書を示す資料が同時に存在することは多くない。

3) 平野満「蔵書に見る知的状況―平山・宇井・林家の場合」『大原幽学とその周辺』八木書店、1981年。石川秀和「江戸近郊農村にみる豪農の文化活動―安川家三代の事例―」『立正史学』第96号、2004年。など

4) 松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成―海西郡荷之上村服部家の蔵書と読書の分析」岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究　第三篇』清文堂出版、2007年。など

5) 小林文雄「近世後期における『蔵書の家』の社会的機能について」『歴史』第76輯、東北史学会、1991年。松尾由希子「近世後期地方医家の蔵書形成とその動機―越後国西蒲原郡鈴木家の事例より」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第53巻第2号、2007年。など

6) 鈴木理恵「近世後期における神職の専業化志向と蔵書形成―芸州山県郡井上家を例として」頼祺一先生大館記念論集刊行会編『近世近代の地域社会と文化』清文堂、2004年。など

7) 東海が中村家に養子入りしたのは明治8年であるため、対象時期において東海は中村家の人ではない。しかし、中村家蔵書には東海が明治8年までに蒐集した書籍が存在するため、明治8年以降に当主になった東海も事例対象としている。

8) 松倉茂「雄踏町沿革史遺稿」『雄踏町誌　資料編四』浜名郡雄踏町、1971年、28頁。

9) 古橋一男、嶋竹秋、新村嘉十編『雄踏村誌』雄踏町誌郷土資料部、2000年、31~32頁。

10) 中村家文書「中村家由緒書」（資料番号715-11）。本稿で用いる「中村家文書」は全て、浜松市博物館寄託の史料である。

11) 中村家文書「遠江国雄踏村宇布見中村家」（資料番号1478）

12) 由緒書の性格として、家の権威を高めるために史実とは異なる説明が述べられることがある。そのため、他の史料と合わせて由緒書の内容の真偽を確認する必要があるが、現段階において由緒書に補足できるものをみつけられていないため、由緒書を参照する。

13) 近世は、「家」制度の社会である。以降、「家」と表記する場合、「固有の家名、家産、家業をもつもので、地域共同体と結びついて存在する」（前掲註1「江戸期上層庶民の家の蔵書に関する研究－学習環境の視点から－」1頁）という観念をさすものとする。近世において、家人は世代を超えて「家」が永続することを願っていた。

14) 「中村家由緒書」（前掲註10）の18代正吉の履歴に「永禄十一年三月東照宮三州ヨリ御忍ニテ正吉宅被成御一泊、翌日正吉故小藪村迄御船ニテ濱松城地御案内仕候」とある。

15) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」（前掲註11）

16) 結城秀康の生誕に関わる胞衣塚は中村家の屋敷の中にあり、「中村家由緒書」（前掲註10）などによると明治半ばを過ぎても、松平康荘侯爵など松平家が中村家に修繕費を援助

していた。

17) 中村家文書「中村東海履歴」(資料番号 715-9)。 同史料は下書のため各所に挿入や見せ消ちなどの推敲した形跡を確認することができる。そこで、史料引用に関してはなるべく原文に近い様式になるように努めた。そのため、意味が取れない箇所・文意があること、煩雑に見える点をあらかじめことわっておく。なお「　」内はとくに断りのない限り挿入を、意味する。見せ消ちは抹消線であらわし、囲み線は原文に準じた。

18) 浜松市『浜松市史　二』浜松市、1971 年。

19) 同上書、156～157 頁。

20) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」(前掲註 11) の 28 代大館の履歴に「天保十三年寅年二月出府家督継目御礼美作中将斎民殿於表書院面謁任（ヵ）嘉例古酢鮮魚差上葵紋服拝受」「弘化二巳年美作国主中将松平斎民殿天神宮神社代々世襲兼作州藩士列候処」とある。

21) 中村正直『負け犬の系譜―中村家 800 年の歴史』1995 年、99 頁。

22) 『引佐町史料第十二集　山本金木日記』引佐町教育委員会、1980 年、1 頁。

23) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」(前掲註 11) の大館の履歴に「天保十三寅年二月出府家督継目御礼美作中将斎民殿於表書院面謁任（ヵ）嘉例古酢鮮魚差上葵紋服拝受」とある。先にも述べたように、18 代正吉の時に中村家で家康の二男である結城秀康が誕生したという由緒を背景に、中村家は秀康の長男の子孫になる美作津山藩とつながりをもっていた。

24) 中村家文書「親類書」(資料番号 619-8)

25) 石井良助監修『編年江戸武鑑・文政武鑑』柏書房、1982 年。

26) 中村家文書「中村大館小伝」(資料番号 715-8)

27) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」(前掲註 11)

28) 『遠江歌人略傳　上巻』(浜松市立中央図書館所蔵) 26～28 頁。

29) 中村家文書「故平田先生授業門人姓名録　上」(資料番号 1016)

30) 前掲註 18、423 頁。

31) 養子入りの年は不明であるが「内藤神主家系図」(中村家文書、資料番号 134) により、嘉永 4 年 (1851) に内藤家の家督を継いでいることがわかる。

32) 同上文書「内藤神主家系図」

33) 中村家文書「中村家の由緒・中村東海の履歴」(資料番号 715－9)

34) 前掲註 18、599～604 頁。

35) 古橋一男、嶋竹秋、新村嘉七編『雄踏の石碑』89 頁。

36) 「雪荷派系統表」(前掲註 18、603 頁) 参照。この表で、東海の実父は「加茂鞆音」と記されている。

37) 前掲註 35、11 頁。

38) 岩崎鐵志「近世東海道の宿駅文化―遠江日置流印西派結社の展開」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』12-1 号、1998 年、4 頁。

39) 「故平田先生授業門人姓名録　上」(前掲註 29)

40) その様子は「幕末維新期の東海・大館の実績」(中村家文書、資料番号 715-10) に詳しい。高木俊輔氏が整理した報国隊の隊員名簿(「草莽諸隊員名簿について―東海道の報国隊・赤心隊・伊吹隊の場合」信州大学人文学部編『人文科学論集　第 16 号』信州大学人文学部、1982 年、189 頁) にも東海の名前が載っている。

41) 田崎哲郎編『三河知識人史料』岩田書院、2003 年、224 頁。東海は 1862 年作成の本書で、「内藤出雲」として記されている。

42) 「刊本・写本」とは、1 点の書籍の中に刊本と写本が綴じられている形態のものをさす。

43) 竹内誠、深井雅海編『日本近世人名辞典』吉川弘文館、66～67 頁。

44) 前掲註 18、603 頁。

45) 前掲註 43 (334～335 頁) 。故実家である。父和恒は江戸で御家人になり、奥御右筆を勤め、駿河台下の紅梅坂に居住した。長男である栗原信充 (1794～1820) は、幼い時から才能を認められ、平田篤胤から国学を学び、柴野栗山から漢学を学んだ。

46) 中村家の国学に関わる書籍をみると、平田国学以外のものも存在している。このように平田国学以外の書籍を所蔵する背景として、本文で述べた以外には、他の門人と議論になることもあったため、他の門人の書籍内容も知識として知っておく必要があったと考えられる。

47) 三河国吉田藩士であり、中山美石の孫である (豊橋市史編集委員会編『豊橋市史　第二巻』豊橋市、1975 年、892 頁) 。『三河知識人史料』(前掲註 41、86 頁) により、平田門人であることがわかる。藩校時習館の教授も勤めた。

48) 同上書『豊橋市史　第二巻』816～818 頁。中山美石 (1775～1843) は、三河国吉田藩士である。本居大平に学び、文化 14 年 (1817) に藩校時習館の教授になる。

49) 夏目甕麿 (1733～1822) の家は、浜名郡白須賀 (現静岡県湖西市) で酒造業を営んでいた。名主を勤めた家で加納諸平の父でもある。内山真竜、本居宣長、本居春庭に入門し、本居大平にも学んだ。

50) 前掲註 43、249～250 頁。加納諸平 (1806～1857) は、夏目甕麿の息子であるが、父が亡くなった後に紀州藩医加納伊竹の養子になった。本居大平の門人である。

51) 同上書、123 頁。内山真竜 (1740～1821) は、遠江国豊田郡大谷村 (現静岡県天竜市) で庄屋を勤めた。賀茂真淵に入門する。本居大平とも交流があった。

52) 小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、1994 年、596 頁。栗田土満 (1737～1811) は、遠江国城飼郡平尾村 (現静岡県菊川市) の平尾八幡宮神職の人である。賀茂真淵に入門し、本居宣長にも学ぶ。

53) 前掲註 18、482 頁。近世初期から徳川氏の崇敬が深い神社で、300 石の朱印が付せられていた。

54) 引佐町編『引佐町史　下巻』引佐町、1993 年、51 頁。

55) 『豊橋市史　第二巻』（前掲註 47）、869～877 頁。
56) 同上書、869～877 頁。
57) 前掲註 18、540～542 頁。
58) 「幕末維新期の大館及び東海の実績」（前掲註 40）

［付記］
本研究は、学術研究助成基金助成金（若手研究（B））「近世・近代移行期の職業転換にみる近世の学問の意義と展開」（課題番号 23730740）の助成を受けたものである。

［謝辞］
本稿作成にあたり、史料の閲覧及び利用を許可して下さった中村正直様に心よりお礼を申し上げます。また、史料の閲覧に際して、浜松市博物館の方々、特に宮崎様にはご配慮とご教示をいただきました。嶋竹秋先生には宇布見の歴史や人物についてご教示いただきました。末筆ながら、ここにあわせて心からお礼を申し上げます。